

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Hossam Younes Abd El Aziz Younes
出身地：エジプト・カイロ
所属：Research & Trade Facilitation Manager,
Egyptian International Trade Point(EITP),
Ministry of Trade & Industry
日本滞在：2008年4月～9月

はじめての日本

私は今回が初来日であり、アジ研の海外客員研究員として千葉県の幕張に五カ月間滞在した。本エッセイではその間に私が感じた日本に対する驚きを紹介したい。はじめに断っておきたいのは、私は日本を誹謗するつもりは全くない。単にひとりのエジプト人が日本での生活で何を感じたかを知ってもらいたいだけである。

日本の第一印象は清潔かつ安全で、エジプトとはすべてが違って見えた。とは言え、私は来日前に日本と日本文化について十分に予習しておいたので、心の準備は万端だった。至るところにセブンイレブンやマクドナルドがあることは知っていた。スターバックスもカイロで経験済みである。従って、最低限の日常生活で困ることもなく、すぐに日本にとけ込めると思っていた。しかしながら、実際の日本での生活は驚きの連続であった。それはまるで別の惑星に来たような気分だった。

まず驚いたのは食べ物である。日本人は健全な食生活を送っているようで、メタボな人もエジプトよりもずっと少ない。それはすばらしいことであるが、ピザに載せる奇妙なトッピングは理解に苦しむ。なぜコーン、サーモン、ナスなどをピザにトッピングする必要があるのだろうか。また、

生魚をご馳走とするのもよく分からない。調理もしていない魚がなぜご馳走になるのだろうか。

次に驚いたのは言葉である。日本人の母国語が日本語であることは知っていたが、多くの日本人が英語を話さないことは驚きであった。英語は世界共通語ではなかったのか。また、商店や駅に英語の表示や案内が少ないこともショックであった。一方で、日本のテレビや音楽を見聞きしていると、日本はアメリカ化し、伝統的な日本文化を失ってしまったように感じた。しかしながら地方では伝統文化が色濃く残っているようで、田植えを見学に行ったときは日本の伝統文化を垣間見ることができた。もっともテクノロジーの国らしく、田植え自体は機械を駆使して行われていたが。

日本の習慣でカイロの我が家にも取り入れたかと思っただけ、家の中で靴を脱ぐことである。日本ではどの家を訪ねても玄関で靴を脱ぐように言われる。最初は慣れないためちよつと戸惑ったが、これはとてもいい考えである。カーペットも汚れず、室内を清潔に保つことができる。もっともスポーツジムでさえ、屋内用に別途スニーカーを持参しなければいけないことには驚いた。



田植えを見学する筆者

日本での生活は、私にとって驚きの連続であった。短い期間ではあったが、日本と日本文化について多くのことを学んだ。しかし、日本での生活を通じて実感した最大のことは、表面的な形こそ違え、人間はみんな同じ問題や困難に直面しているということである。その点においてエジプト人も日本人も違いはない。人種や文化の違いは本質的なことではなく、人はみな同じであるとの思いを強くした五カ月間でもあった。

(前海外客員研究員／訳 土屋一樹)

ホッサム・ユネス